

農家のヨメ?!通信

VOL.12

農家に嫁いで感じた「?」や「!」をお届けします。
農家の暮らしは、かなりオモシロイ!



ヨメ?!

十勝で100年続く
とやま農場の長男のヨメ。
帯広市内の印刷会社に勤める。
2歳女兒のハハ。

父のこと

「ほら、山、見てみなさい」。幼い頃、車で近場をドライブしていると、よく父がそう言っていた。なぜかそのことを、今更ながら思い出している。その頃の私は山の景色などに興味はなく、その価値がわかったのは、ハタチくらいの頃だった。東京の大学に進学し帰省する際、灰色がかった東京の空を飛び立った飛行機は、えりも岬沖から十勝に入る。雪をかぶった日高山脈と春耕の香り立つ茶色い大地、夏のパッチワークのような美しい畑、夕焼けが日高山脈に沈み十勝を真っ赤に染め上げる瞬間……。ここに帰ってこよう」と決めたのは、その景色を見てのことだった。そして、その見下ろしていた畑のひとつに嫁ぐと決めた時。両親は手放しで喜んでくれた。

以来、植え付けや草取り、収穫など、農場に人手が必要なときは喜んで手伝ってくれ、最近はずの子守にも忙しい。山に川にと自然の中でたくさん遊んでくれた父。その記憶は、思い出すといつでも心をあたたくしてくれる。「じいじ」になつた今、きつと孫にも、畑から見える日高山脈を「見てごらん、綺麗でしょう」と伝えてくれるのだろう。



三密

新型コロナウイルスの感染拡大を予防するための「新しい生活様式」が発表され、中でも3密を回避する、ということが基本と言われている。感染者数が増加している首都圏や都市部では、この「密閉・密集・密接」を避けることが難しい。その点、農村地域は3密とはまったく真逆。例えば農場の敷地は36ヘクタール。これは東京の歌舞伎町と同面積だ。この話をすると、聞いた人はなんだかよくわからないけれど、「おぉ〜!」となる。そこを歩き来する人の数といえば、夜は平常時で3万5千人ほど。一方、我が家の場合も多くてもせいぜい10人。3密とはかけ離れた空間である。

私の会社でもテレワークやネット会議システムなどが推奨され、多くのことが変わった。仕事がどこでもできれば、住みたい場所に住むことも可能。北海道移住も今よりずっと進むかもしれない。逆に、農業は「土地」の上で成り立つ職業。「ここ」でなければできない。食べるものが近くに暮らして。目で見える、顔が知れる小さなコミュニティがとても豊かだということに多くの人が気づき始めている。



フィンランド式サウナ

昨年のタイルに続き、オットがハマったもの、それは「サウナ」。それもよくある乾式(温度が高く湿度が低くカラッカラになるやつ)ではなく、湿式(温度が低く湿度は70〜100%)のもの。温泉施設によってはミストサウナなどを導入しているところもある。

先日我が家で体験したのは、屋外でのテントサウナ。専用のテント内にストーブを設置し、その上に特殊な石を乗せてそれに水をかけて蒸気を出す「ロウリュ」というスタイルだ。90℃くらいになるのだが、湿度があるせいか、苦しくはない。テントから出て水風呂に浸かる瞬間、そして畑を眺めながらの外気浴が、最高に「とこのう」(これもサウナ用語)。オットは髪を守るためのサウナハットや湯浴み着などを購入。家族だけでなく、訪れたゲストにも体験してもらえらるように目下企画中だ。以前は温泉に行っても、大抵はオットが待つほうで、「遅い」と言われていたが、サウナがあるところでは、上がるタイミングもパッチリ合うようになった。広大な畑を前にした「とこのう」体験、この心地良きの余韻はしばらく続きそう。

